

地場産業「結城紬」の後継者育成

「結城紬産地振興人材育成事業」からみる伝統と技術の継承に向けた取り組み

筑波総研株式会社 主任研究員 山田 浩 司

1. はじめに

わが国では、各地域の歴史や文化、特性などを背景に、古くからその地に根差した伝統工芸品や美術品の制作を担う中小事業者が集積している。こうした企業群は「地場産業」と呼ばれ、集積するメリットを活かして産業としての優位性を持ち、その地の名を冠した「ブランド」を形成してきた。

しかし、高度成長期以降の産業構造の変化に伴い、地場産業を取り巻く環境は大きく変化している。とくに、後継者不足の問題は深刻であり、業歴の長い老舗企業であっても、後継者がいないために事業が継続できなくなるケースが数多く見られる。

茨城を代表する地場産業であり、伝統的工芸品として全国有数の絹織物である「結城紬」でさえ、他所と同様に後継者育成が大きな課題となっている。

そこで本稿では、茨城県産業技術イノベーションセンター繊維高分子研究所が中心となって展開している「結城紬産地振興人材育成事業」の取り組み内容について整理した上で、今後の後継者育成を展望していく。



結城紬（結城市提供）

2. 結城紬について

■歴史ある地で育った「結城紬」

結城紬は、茨城県結城市を中心に、茨城県・栃木県の鬼怒川流域で生産される絹織物である。結城市は鎌倉時代に結城朝光氏^{ともみつ}が初代当主となって以降、約420年に亘って結城家が治めた地であり、市内には歴史ある見世蔵や寺社が立ち並ぶなど、城下町としての面影を残している。

結城紬の歴史をみると、「常陸国風土記」に出てくる「紬^{あしぎぬ}」が結城紬の原型とされている。奈良時代に常陸国の特産品として朝廷に上納された紬は、現在も奈良県の正倉院に保管されている。

また、鎌倉・室町時代には「常陸紬」の名で幕府に献上された。結城家では代々紬産業を保護・育成し、結城紬はやがて諸国名産の1つに数えられるようになった。「結城紬」とよばれるようになったのは、江戸時代に入ってからと伝えられている。

■全て手作業によって行われる作業工程

結城紬の製作には約40の工程を要し、その全てが手作業によって行われる。中でも、結城紬の特有な工程として知られている、①繭を広げた真綿より両手を使ってすべての糸を紡ぐ「糸つむぎ」、②拵模様^{かすり}を出すため、糸を染色する際に染料が付かないよう糸でくるくると「拵くり」、③日本で最も古い織り機といわれる地機^{じばた}を使った「地機織り」がある。

これらの3工程は1956年に国の「重要無形文化財」に登録されている。結城紬のうち、これらの3工程を取り入れたものが「重要無形文化財結城紬」と呼ばれる。また、2010年に結城紬は「ユネスコ無形文化遺産」に登録されている。こうした伝統的な手法を守り、高い技術力を維持するこ

とで、結城紬は世界に誇る伝統的工芸品としての地位を現在まで維持してきた。

結城紬は、真綿から手で紡いだ撚り（ねじりあわせること）のない糸を使い、経糸と緯糸を1本1本交互に織る「平織」で作られるため、空気を多く含み、軽くて、暖かく、着心地の良い仕上がりとなるのが特徴である。なお、撚りをかけた糸を使用する「縮織」もあるが、現在、結城紬ではその多くが平織である。



「糸つむぎ」(左)と「拵くくり」(右) (結城市提供)

■生産量減少と担い手の高齢化で後継者が不足

他所の伝統的工芸品と同様に、高度成長期以降、結城紬を取り巻く環境は大きく変化していった。結城紬は、職人の高い技術による手作業での仕上げが高い付加価値を生んでいるが、高度成長期の人件費の高騰に加え、和服を着る機会の減少などの生活様式の変化、機械化による大量生産の安価な競合品の増加などの影響を受け、結城紬の需要は減少し続けた。

本場結城紬検査協同組合「本場結城紬実態調査報告書」によると、結城紬の生産反数は戦後から1980年のピークにかけて約3万反で推移していたが、それ以降は減少が続き、現在は約1,000反となっている。これに伴い生産者は減少し、また、高齢化も進んでいることから、後継者の育成が課題となっている。

3. 結城紬の後継者育成に向けた茨城県の取り組み

茨城県は結城紬の振興策として、1922年、結城市内に「茨城県工業試験場」を設立した。

2018年には「茨城県産業技術イノベーションセンター繊維高分子研究所」に名称を変え、長年に亘り繊維に関する試験や研究、技術指導などを通じて結城紬を支援している。

同研究所では、結城紬の即戦力となる「織り手」の育成について業界団体の要望を受け、1996年度から後継者育成のための研修を実施している。今回、同研究所繊維・紬グループに対し、同研修の内容、また、今年度の研修生に対し参加のきっかけなどについて話を伺った（インタビュー日：2020年8月3日）。

■即戦力となる結城紬の織り手を育成

「結城紬産地振興人材育成事業」における研修では、修了生が結城紬の織り手として就業することを目的とし、毎年最大4人の研修生が1年間の研修カリキュラムを通じて機織りの技術を身につけていく。これまでに約80人が修了し、織り手として県内の機屋に所属し結城紬の生産に携わっている。

研修では、まず、4～5月に座学や糸の結び方である「機結び」、糸つむぎなどの基礎を学ぶ。次に、5～7月にかけて実際に地機を使って帯の製織を行う。その後、研修を修了する翌年3月までに着尺2反と拵製織を行う。

今年度は新型コロナウイルス感染症の流行の影響もあり、研修が本格的に始まったのは6月からとなった。この間の対応として、同研究所では、研修生向けに「機結び」の方法などを解説する動画をインターネット上に公開したり、資料を送付したりするなど、自宅でも学習できるように工夫をしたという。

研修カリキュラムの構成は、同研究所がオリジナルに作成した内容となっている。篠塚雅子繊維・紬グループ長は「当研究所には、100年近く繊維に関する研究・指導を行ってきた技術と20年以上研修を続けてきたことで培われてきたノウハウがあります。そのため、初心者でも分かりやすく、無理なく技術習得ができる研修内容になっていると思います」と語る。

■「織り」以外の工程も学べる研修カリキュラム

同研究所の研修の特徴は、帯や着尺を製織するにあたり、糸の準備や染色、^{したごしら}下拵え（染色した糸を織り機にセットして織れる状態にするまでの工程）など、約40にもなる結城紬の生産工程を一通り研修生に実習させることである。本来、結城紬の製作は分業制であるため、織り手がこうした工程に関わることはないという。

この目的について、中野睦子主任研究員は「結城紬は織る前の準備として、撚りのない糸を補強するため『糊つけ』を行います。糸によって毛羽立ち具合が異なります。その際、実際に糊つけの経験をしておくことで、どう織れば良いかなどの判断に役立てることが出来ます。このように、結城紬が出来るまでの一通りの工程を実際に経験しておくことで、織りの技術にもフィードバックができ、理解も早くなります」とその効果を説明する。

また、もう1つの目的として、織りの技術向上を目指しつつも、将来的には他の工程にも携われるような人材に成長してほしいという思いがある。現在、業界では織り以外の工程の後継者も不足している状況であるため、業界団体では糸つむぎや拵くりなどの後継者育成にも取り組んでいる。同研究所も業界団体と連携しながら、今後も後継者育成に必要な支援を行っていくとしている。



地機を使って帯の製織に取り組む研修生（筆者撮影）

■「作り手」としてのさらなるステップアップを支援

今後の展望について、同研究所は修了生に対し、その後の結城紬の後継者としてのさらなるステップアップの支援にも対応していきたいとしている。

研修生は修了後に県内の機屋に所属し、「織り手」としてさらなる技術の研鑽を続けることになるが、今後多様化すると考えられる製品の「作り手」としては、織りの技術向上とともに、多くの作業工程の理解と技術習得が必要とされる。

中川力夫所長は「当研究所では、未経験者向けの育成研修を中心としていますが、すでに織り手として製作に携わっている人にも、産業技術イノベーションセンターの様々な制度を活用して、技術向上や各作業工程の技術習得のための支援を行っていきたいと考えています」と語る。

これまでの修了生の中には「伝統工芸士」の資格を取得する人も出てきている。篠塚氏は「まずは、織りの技術を磨き、作品展で入賞を目指し、将来的には、伝統工芸士の資格取得を目標にしてもらいたいと考えています。当研修を修了した人が作品展で受賞したり、伝統工芸士の資格を取得することは、当所にとっても大変嬉しく、誇らしいことです」と研修後のさらなる活躍に期待する。



（左から）お話を伺った篠塚氏、中川氏、中野氏（筆者撮影）

■研修に参加する研修生の夢

今年度も県内外から4人の研修生が集まり、結城紬の織り手として技術の習得に励んでいる。

研修に参加したきっかけについて、研修生の1人である川道早姫さんは「もともと、技術職に興味があり、実際に結城紬の機織り見学をしたことで織り手になることを決めました。また、特有の織り機である『地機』に強い魅力を感じたことも決め手でした」と語る。他の研修生には、県内の学校で服飾関係について勉強した後、広報誌で研

修について知り参加した方もいる。

竹内京子さんは、これまで20年勤めていた都内の会社を退職し、結城紬の織り手となるべく研修に参加している。竹内さんは「前職もやりがいを持ってやっていたのですが、今後の“人生100年”を考えた中で、第2のプロフェッショナルを目指したいと思い、織り手の仕事にチャレンジしました」と語る。

結城紬の織り手という仕事を選んだきっかけについては、「昔から着物に憧れを抱いていましたが、当時は夢でしかありませんでした。しかし、結城紬のイベントや見学を通じて、徐々に夢が現実味を帯びていき、研修に参加しています。また、会社と違い、定年を過ぎても続けることができるのも決め手となっています」と話す。

今後の展望について、「まずは、織りの技術を習得していきますが、結城紬には織り以外にも色々な工程があります。こうした川上から川下にかけての工程も学んでいければと思います。また、結城紬は注文を受けた通りに織りますが、出来上がった結城紬をどんな人がお召しになるのかについても興味があります」と思いを膨らませます。



お話を伺った竹内さん(筆者撮影)

4. おわりに

現在、結城紬の後継者を育成する研修が開始されて20年以上が経つ。その間、各年齢層に偏りなく織り手が増えたことは同研究所の取り組みの成果といえる。今後、織り以外の工程についても後継者が増えていくことを期待したい。

今回、研修生に話を聞いて、研修に参加する前

から織物に興味や憧れを抱いている人が多いと感じた。これまで、業界や自治体、地域住民が結城紬に関する体験・見学ができるイベントを開催しており、産地をあげて結城紬をPRしていることも後継者の確保につながっている。

また、結城紬の新たな展開として、業界団体、卸商、県、自治体が連携し、「変わり織り帯『彩-irodori-』」を開発した。

帯の開発に携わった中野主任研究員は「結城紬で伝統的に用いられてきた『平織』ではなく、例えば経糸と緯糸を2本ずつ浮かせて交差するなどして織る『変わり織り』を用いることで、従来の結城紬にはない、生地凹凸感を表現しました。結城紬の新しい商品として外部にPRしていきたいと考えています」と結城紬の新たな動きへの期待を語る。

結城紬には、その丈夫さと着続けることで味が出ることから「結城三代」という言葉があり、母から娘、孫へと大切に引き継がれてきた。今、若い世代が結城紬の伝統と技術を引き継ぎつつ、新しいことにも挑戦することで地場産業の活性化に取り組んでいる。今後のさらなる活躍に期待したい。



変わり織り帯「彩-irodori-」(繊維高分子研究所提供)

参考文献

- 茨城県高等学校教育研究会「茨城の伝統産業」茨城新聞株式会社(1977)
- 本場結城紬検査協同組合「本場結城紬実態調査報告書 平成30年」(2019)
- 茨城県産業技術イノベーションセンター「令和元年 茨城県産業技術イノベーションセンター成果集」(2020)